

Title	廬隱の作品にみる社会問題意識
Sub Title	Lu Yin's works and her way of recognizing social problems
Author	中本, 百合枝(Nakamoto, Yurie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1985
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.47, (1985. 12) ,p.65- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00470001-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廬隱の作品にみる社会問題意識

中 本 百 合 枝

五四時期の女流作家がどのような考えを持ち、揺れ動く社会を、その作品の中にどう表現していったかという事が目下の私の関心事である。ここでは謝冰心と共に盛名をさせた廬隱の作品を取り上げ、そこに社会問題がどのように反映されているかをみてゆきたい。その十四年足らずの著作生活を次のように五つの時期に分けて考えてみる事とする。

(一) 大学時代—郭夢良との交際(『海濱故人』)

最も初期に書かれたのが『海濱故人』集(商務印書館、一九二五年七月)であるが、集中「思潮」を除く十三編は、次のようにすべて『小説月報』に発表されている。

- 一九二一年 二号 「一個著作家」、六号 「一封信」、八号 「兩個小學生」、十一号 「靈魂可以賣嗎」
- 一九二二年 六号 「餘淚」、十号 「月下的回憶」、十二号 「或人的悲哀」
- 一九二三年 一号 「彷徨」、六号 「麗石的日記」、十号 「海濱故人」、十二号 「海濱故人」續
- 一九二四年 四号 「淪落」、五号 「舊稿」、六号 「前塵」

これにより、『海濱故人』集は一九二二年〔一〕から一九二四年の間に書かれたものとみてよいかと思う。

では、この集の婦人問題に関する小説から取り上げてみよう。

「麗石の日記」の麗石は同性と恋をしているが、その相手は男性との愛に目覚め、やがて結婚しようとしている。彼女は失望のあまり病死するのだが、この小説には結婚に否定的な作者の考えが明白に打ち出されている。

「海濱故人」の中では、女性が学問する事についての疑問が投げかけられる。

進了學校、人生觀完成變了。不容於親戚、不容於父母、一天一天覺得自己孤獨、什麼悲愁、什麼無聊、逐件發明了。……豈不是知識誤我嗎？〔二〕

女は何も知らない事が美德とされた長い伝統の下では、自由を求めて大学にやってきた進歩的な女性達も、ふと孤独に陥ることがあったのであろう。

この小説の後半には、親の決めた妻を持つ梓青と露沙の苦しい恋が描かれている。これは明らかに郭夢良と廬隱をモデルにしたものであり、この小説の中でははっきりした結末は示されていないが、実際には周囲の大反対に抗して二人は結婚するのである〔三〕。

「淪落」では、処女性の問題が提出される。主人公松文が処女でない事を打ちあけるや、恋人はいとも簡単に彼女を捨て他の女性と結婚してしまう。作者はこの男性の軽薄窮まりない行為について何ら批判的な態度はみせず、ただ松文に同情を寄せるばかりである。

「前塵」は、「海濱故人」の続編であり、郭夢良との新婚生活を描く。主人公は、結婚生活に対して失望し、このまま家庭の中に埋もれてしまうのではないかという不安を抱いている。だが不安は不安のまま投げ出されているだけで、何

らの方向性も示されてはいない。

以上、婦人問題についてみてきたが、その他の社会問題はどのように扱われているのであろうか。

「一封信」は、十五歳の少女が借金のかたに陳家に連れてゆかれ、折檻の為に二日めの朝には已に息絶えていたという筋書である。この小説は友人からの手紙の形で語られるが、手紙を書いている友人も、読んでいる「私」も、共に外側から同情するという立場で描かれている。

「兩個小學生」は、請願デモに参加した二人の小學生が新華門で負傷した事件を取り上げる。盧隱は北京國立女子高等師範學校⁽⁴⁾で學生運動に参加しており⁽⁵⁾、この作品はその活動の中から生まれたものではないかと思われる。ここには傍看者の態度はなく、迫力のある短編小説となっている。合法的な請願デモのはずなのにこんなひどい事になってしまつて、一体法律は何の為にあるのだという負傷した小學生の母親の叫びも力強く、作者の怒りが伝わってくるようである。

「靈魂可以賣嗎」は、工場で労働する女工の叫びである。三、四年の間毎日機械と向い合っていると、機械の一部になつてしまつたような気がする。賃金を得る為に、労働力だけでなく魂まで売り渡してしまつていいのであろうか、という悩みを訴える女工に「私」は答えることができない。この作品は、貧しい女工と顔見知り程度の、「私」の眼で描かれてはいるが、聡明な女工は実に生き生きとしている。

「餘淚」は、かつての恩師である修道女が内戦を憂え、自ら戦場に赴いてその愚を説いてまわるが、流れ玉に當つて死亡するという物語である。ここでは革命の意義は全く問題にされず、いかなる理由にせよ、同じ人間同士が殺し合つてはならないという思想が強調されている。ここでは、作者の人道主義者としての視点に注目しておきたい。

「月下的回憶」は、日本軍侵略の様子を描いている。日本人教師が日本語の教科書で子供達を教育し、中国の精神を骨抜きにしている事、モルヒネによる中毒患者の問題、売春の問題が持ち出されるが、回想の形を取り、主人公はその話の聞き役に過ぎない。

以上、社会問題に関する小説を見てきたが、この時期、廬隱は学生運動のリーダー的存在であり(6)、生涯を通して唯一、直接的に社会問題と取り組んだ時期であった。にもかかわらず、その小説は大衆としての眼を持つことができず、常に傍看者である。それは、知識分子が運動の中心であった五四という時代の影響もあるであろうし、廬隱の資質にも関わってくるであろう。

廬隱はこの集について、次のように述べている。

其中除了一兩篇如海濱故人、等是真的由我生活中體驗出來的東西、其餘多半由於間接聽來、或者空想出來的、在這本冊子裏、充滿了哀感、然而是一種薄淺的哀感、(以下略)(7)

悲哀は、廬隱の作品に於て大きな主題の一つである。幼少より母に愛されなかったという深い心の傷、度重なる不幸。大きすぎる悲しみは廬隱の眼を内へ内へと向わせはしたが、それでも社会に対して精一杯の疑問を投げかけている。婦人問題に関しては、この集ではまだ明確な意識がみられない。

(二) 郭夢良との結婚・夫の死 (『靈海潮汐』、『曼麗』)

『靈海潮汐』集(上海開明書店、一九三一年一月)、『曼麗』集(北京古城書社、一九二八年一月)中の作品が執筆されたのは何時頃であろうか。『小説月報』には、『靈海潮汐』集中の作品が次のように掲載されている。

一九二五年 一号「父親」、四号「幽弦」、六号「勝利以後」、十号「秦教授的失敗」、十二号「危機」

一九二六年 十号「寄天涯一孤鴻」、十一号「靈海潮汐致梅姐」、十二号「寂寞」

一九二七年 一号「藍田的懺悔錄」、二号「何處是歸程」

一九二八年 十二号「雨夜」

(残る一篇「雲蘿姑娘」は掲載されていない。)

一方、『曼麗』集については肖鳳が、『曼麗』集中共收有十九個短篇、大多數寫於一九二七年九月以前的四五個月裏。⁽⁸⁾と述べている。閻純徳が、「這時期⁽⁹⁾」、她創作的小説、散文和散文詩、多發表在北京『晨報』副刊和石評梅所辦的『薔薇周刊』上、其短篇集成一冊、名曰『曼麗』。⁽¹⁰⁾と記している所からみて、肖鳳は『晨報』副刊と『薔薇周刊』に發表された時期に基づいて述べているものと思われる。『薔薇周刊』は見る事ができなかったが、『晨報』副刊に發表された作品は次の通りである。

一九二六年 十二月「西窗風雨」

一九二七年 一月「寄燕北諸故人」、二月「時代的犧牲者」、四月「血泊中的英雄」・「風欺雪虐」

以上をまとめてみると、「雨夜」、「雲蘿姑娘」を除く『靈海潮汐』集の作品は、一九二五年から一九二七年にかけて執筆されたものであり、『曼麗』集は、ほぼ一九二七年前半に成ったものと考えることができようであろう。

それでは『靈海潮汐』集中の、婦人問題に対する意識の表われている作品からみていく事にする。

「父親」は、騙されて嫁いできた若き継母に恋をする青年の日記である。夫には既に本妻がいる事を知り、まだ二十七、八才にしかならない継母は、自分の人生をあきらめてしまっている。

但是我是女子、嫁給他了、什麼都定了、還有我活動的餘地嗎？有人也勸我和他離婚、——這個也說不定是與我有利益的、但是世界上男人有幾個靠得住的、再嫁也難保不一樣的痛苦、我一直忍到現在——我覺得是個不幸的人(1)。

經濟的自立的手段を持たない女たちは、離婚することもできず、ただじっと耐えるしかない。作者は、このように悲惨な境遇に置かれていた女性たちに限りない同情を寄せ、それを許している社会に憤りを感じているはずのだが、それは読者に強く印象づけられない。青年の日記を「私」が読むという、間接的な手法に依つていふという事もあるうが、やはりこういう境遇にある女性の問題を作者が自分の事として捉えることができないう所に原因があるといえよう。

「勝利以後」は、家事に追われる生活に満足できず、何かをしたいという高等教育を受けた女性の悩みを訴える。

但是我覺得女子入了家庭、對於社會事業、固然有多少阻礙、然而不是絕對沒有顧及社會事業的可能。現在我們所愁的、却不是家庭放不開、而是社會沒有事業可作(2)。

しかし、この主張は女性差別社会に対する批判にはならず、結婚否定という結論に流れてしまっている。

「何處是歸程」も、結婚した事を後悔する女性が主人公である。家庭に縛られ、社会的に何らの貢献も為すことができないと訴える主人公に、三妹妹は婦人解放運動をしていた独身の伯母の話をする。孤独な彼女がやはり結婚していた方が良かったと言ったという事を聞き、主人公は嘆息する。「怎麼辦？結婚也不好、不結婚也不好、歧路紛出、到底何處是歸程呵？」(3) ここでも議論は結婚すべきか、せざるべきかという次元で行われている。

「藍田的懺悔錄」では、親の決めた結婚を拒否して家出した藍田が、恋人に捨てられ病死する。行動はしてみたものの、社会的に何の力も持たない主人公は、『人形の家』のノラを彷彿とさせる。

我如果能與世界全女性握手、使婦女們開個新紀元、那麼我懺悔以前的、同時我將要奮闘未來的(4)。

重い病の床にありながらも、深い絶望から気持ちを立てさせる主人公のけなげさが、作品の暗さをわずかに救っている。

以上が婦人問題に関する小説である。その他の社会問題を扱ったものとしては、次の二編が挙げられる。

「秦教授的失敗」は、中国の腐敗した家庭を改革しようとする、留学帰りの青年教授を描く。聴衆の前では高い理想を説く彼も、妾を囲い阿片を吸う封建的な父親と対決することができない。自分の家庭も改革できないのに、社会を変えようとしているこの青年を、盧隱はいつになく厳しい調子で風刺している。

「危機」は教育の問題を取り上げる。躰の厳しい家庭に育った二人の生徒が、授業で習ったフランクリンの家出をヒントにして、実行に移す。二人は無事帰って来るが、校長は会議を開いて、生徒の思想に責任を持たねばならないと訓示する。教師たちは皆考え込み、不安な表情である。これは作者が自らの教員生活の中から取材したものである。

以上のように、この集では『海濱故人』集にみられた社会問題に対する関心はほとんど影を潜め、盧隱の眼は専ら自分とその周囲にのみ注がれている。主婦と仕事というテーマを取り上げても、何らかの解決方法を模索するのではなく、結婚否定という結論になっている。これは、盧隱が当時自らの結婚生活に失望していたことを表すものである。だが、郭夢良との生活は、結婚とは何か、その中で女性はどのように生きるべきかという事を考えさせてくれたようである。この集あたりから、婦人問題についてはかなり明確な意識を持ちつつある事が伺われる。

(集中の「雨夜」と「雲蘿姑娘」は、李唯建と出会って後に書かれたものであるから併に入れる。)

次に『曼麗』集であるが、これは手に入れることができず、『盧隱、中國現代作家選集叢書』、『盧隱選集』、『晨报』副

刊によったが、十九篇中五篇は未見である。

ここでも、婦人の問題を扱った三篇からみていく事にする。

「時代の犠牲者」は、留學生の張道懷が十数年も連れ添った妻を捨て、お金の為に他の女性をだまして結婚を目論むという話である。だが妻は、もう一人の犠牲者を出さない為にと相手の女性に真相を打ち明け、その結婚を阻止する。

「自由恋愛」という美名の元に、女性を踏みこむ男たちを告発し、弱い立場にある女性の苦しみを訴えようとはしているが、捨てられた妻の悲哀を強調し過ぎて、女性解放の叫びは焦点のずれたものとなっている。

「西窗風雨」は、両親を亡くして売られてきた幼い女中を描く。彼女を使う立場にある「私」は、自分の娘が十分な保護を受けているのに、この六歳の少女が無理な労働をさせられている事に耐え難い思いを抱く。そして十年後、その女中が死んだという便りを受け取ってやりきれない悲しみに襲われるのである。

「憔悴梨花」は、養母や劇団の座長に虐げられ、生きる希望を失ってしまった京劇の女優が主人公である。彼女に思いを寄せる呉雪屏は、その女優が自殺しようとしているのを目前にしても、ただ言葉で励ますことしかできない。「你应该努力、和這罪惡的社會奮鬥！」⁽¹⁵⁾と。

次に革命を主題とした作品を挙げよう。

「曼麗」は、祖国の為に身を呈して戦おうとする純粋な女性を描く。だが曼麗が入った党は腐敗し切っており、その革命とは程遠い状態に失望した彼女は神経衰弱になってしまふ。しかし最後には、「我病好以後、我要努力找那走得通的路、去尋求光明。以前的閉眼所撞的傷痕、永遠保持着吧！……⁽¹⁶⁾」と記される。「私」は、曼麗の日記を読む立場で、決して行為者になることはないが、これまでの作品のように絶望的な結末を与えてはいない。

「風欺雪虐」では、「両親も家も失い、婚約を解消した女性梅痕が革命戦争に参加する。彼女はその中で失望し、新しい道を探そうとするが、どこに求めればよいのか分らない。「私」は、ここでも友人梅痕の手紙を読み、ただその運命を気遣うばかりである。

「秋風秋雨愁殺人」は、秋瑾をそのいとこの眼を通して、回想の形で描く。「血泊中的英雄」も革命を主題にしたものであり、「生命的光榮」、「一鞭殘照裏」（この二篇未見）も、祖国の運命に関心を寄せる熱血青年や、愛の為に戦場に赴く主人公を登場させる（17）。

以上『曼麗』集の作品を見てきたが、作者はその「自序」の中で、「是在我從頹唐中振起的作品、是閃爍着劫後的餘焰。」（18）と述べている。一九二五年十月に夫を失ってから一年半、『靈海潮汐』集で、自分とその周囲にしか向けられなかった廬隱の眼は、夫の死後身を寄せていた郭家で姑からさまざまな侮辱を受けた後、再び社会に対して開かれたようである。だが傍看者としての態度は変わらず、間接的な描写法を取る作品が多いこともあって、迫力に欠けるものとなっている点は否定し難い。たった一人で子供を育て、教師として働き、その合間に書かれたのがこの『曼麗』集である。

(三) 廬隱を慕う青年の出現（『歸雁』）

『廬隱傳』によると、『歸雁』（神州國光社、一九三一年六月再版）が書かれたのは、『華嚴半月刊』の編集をしていた頃である（19）ということだから、一九二七年後半から一九二八年にかけてであろう。『曼麗』集中の作品を書き終えた後、この作品にかかったものと思われる。

この長編小説は完全な日記の形になっており、日付は三月三日から九月九日までである。北京にもどり、お婆の家から平民教育促進会の編集の仕事に通っている様子が記されている所より、一九二七年の春から秋にかけての、盧隱自身の生活を描いたものとみてよい。

夫や母の死から立ち直れないでいる主人公の前に、心優しい青年が現れる。その熱烈な求愛に対して、「私」は自分が年上である事や結婚歴がある事から、相手を素直に受け入れることができない。青年はその複雑な心理を理解することができず、二人の恋はやがて終つてしまう。この青年のモデルは、郭夢良の友人の弟で、当時法政大學の学生であつた瞿冰森である⁽²⁰⁾。

この小説では、石評梅との交際と彼女の死も描かれており、悲哀に満ちたものとなっている。作者の眼は自分の悲しみだけを見つめ、外に向おうとはしないが、あえて探してみるなら、平民教育促進会に於ける描写を指摘することができさる。

『你這麼個女孩兒、也懂得編輯什麼嗎？』本來在我們的社會裏、女人永遠只是女人、除了作人的玩具似的妻、和奴隸似的管家婆以外、還配有其他的職業和地位嗎？⁽²¹⁾

この他には、革命家智水が虐殺されたニュースに強い憤りを感じたこと⁽²²⁾、某党の指導者の演説を聞き、その愛國精神に打たれたこと⁽²³⁾がみられる程度である。

盧隱はこの頃の事を次に述べている。

我的生命上便有了光明、有了力、所以在歸雁中、我有着熱烈的呼喊、有着熱烈的追求、只可恨那時節、我腦子裏還有一些封建時代的餘毒、我不敢高叫打破禮教的藩籬、可是我內心却燃燒着這種的渴望、因爲這兩念的不調協、我受

盡了痛苦、最後我是被舊勢力所戰勝(略)(24)。

酒や煙草におぼれながらも、何とか立ち直ろうと苦しんでいた時期である。

(四) 李唯建との出会いと再婚(『雲鷗情書集』、『東京小品』第一輯、『玫瑰的刺』、『象牙戒指』)

廬隱がその短い生涯に於て最も充実した幸福な日々を過せたのが、李唯建との数年間であろう。この間、廬隱の精神状態は落ち着いたものとなり、絶望的な悲哀は影を潜める。

まず、先に断ったように『靈海潮汐』集の二篇からみていく事にする。

「雨夜」の主人公は、夫と死別しているが、既に心に決めた人がいる。そこへ昔の知人が傲慢な態度で求婚にやって来るのだが、主人公は厳しく拒絶し、相手の気持ちを考えないこの求婚を、女性蔑視であるとして憤る。

「雲蘿姑娘」は、李唯建との出会いと、その愛に対する苦しみを描いており、ほとんど虚構性はないと思われる。廬隱は『歸雁』の時と同じように、自分が年上である事や結婚の経験がある事などから、極力避けて通ろうとした様子が記されている。

次に、『雲鷗情書集』(神州國光社、一九三一年二月)は、李唯建と知り合ってから結婚するまで(25)に交した六十八通の二人の恋文が収められている。

王禮錫は「序」の中で、廬隱の勇気をたたえて次のように述べている。

廬隱的「誰管得着」的態度是「不理」的態度、「不理」怕不是解決問題的方法、「不理」是違背了舊社會的秩序、這樣的叛徒、是不能在舊社會的秩序下生存的。有了他就没有你、你要站得住、他就得摧毀。(中略)

這一束情書，就是在掙扎中的創傷的光榮的血所染成，牠代表了這一個時代的青年男女們的情感，同時充分暴露了這新時代的矛盾(26)。

廬隱は八歳年下の李唯建との恋に苦しみ抜いたが、結局は周囲の猛反対を押し切って結婚し、その上、二人の交際中の手紙を公開するという、当時としては信じられないような事やつてのけた。これは、結婚の自由を勝ち取ろうと苦闘していた数多くの青年達を、どんなにか力づけたことであつたろう。

『東京小品』集は、廬隱の死後一九三六年の初めに北新書局から出版されているが、第一輯はその内容から、東京にいた一九三〇年八月以降の数ヶ月間に書かれたものと思われる。第二・三輯については、省鳳が「在這國難當頭的時光(27)、廬隱也曾寫過幾篇鞭撻時弊的雜文、批評當權者的胡作非爲、爲飢寒交迫的貧苦群衆吶喊。」(28)と述べて、第二輯の「水災」と、第三輯のほとんどの作品を挙げてゐる。又、錢虹も、

廬隱在完成『火焰』之後、對賣國求榮的反動政府越來越不滿、對禁錮革命的黑暗統治更加痛恨、她手中的筆終於變得犀利起來。一九三三年七月至九月、她在『時事新報』上連續發表了十多篇短小精悍、尖銳潑辣的雜文(29)。

という文の後に、第三輯に含まれている作品を紹介している。

以上の事から、廬隱は上海事変以後、意識的に社会問題と取り組み始めたとして、第二、三輯を伍に入れる事にする。

では、第一輯から、「東京小品」をみてみよう。この作品は九篇の随筆から成っており、日本女性に対する廬隱の意見を聞くことができる。

「三、鄰居」では、日本の女性が小羊のように男性に従順なのを見て、「世界上最没有个性的女性呵、你們爲什麼情願

作男子的奴隸和傀儡呢！」(36)と叫びさうになる。又、「五、櫻花樹頭」では、留学生老張によって、日本の女性は世界で最も解放されており、貞操觀念を持つていないから、子供さえつくらなければ何ら責任を取る必要がないと語られる。

女權的學說儘管像海潮般湧了起來、其實只是爲人類的歷史裝些好看的幌子、誰曾受到實惠？——尤其是日本女人、到如今還只幽囚在十八層的地獄裏呵！難怪社會永遠呈露着畸形的病態了！……(37)

日本の女性達は、中国の女性より以上に悲惨なものに映つたようである。

「六、那個怯弱的女人」では、夫の暴力に悩む隣家の妻が、じつと屈辱に耐えている事に憤慨する。自立の手段を持たない女性の立場に立って、離婚したくともできない妻の心中を思いやるということは、廬隱にはできないようである。

「九、烈士夫人」は、かつて中国人と結婚していた日本の女性を描く。五十歳近いその人が、生きていく為に愛情のない結婚をするという話を聞いて、女性の地位の低さに廬隱はため息をもらす。

では次に『玫瑰的刺』集(中華書局、一九三三年三月)の作品を検討してみよう。『廬隱傳』によれば、杭州にいる半年の間にこの集に収められている小説を書き、同時に『象牙戒指』も執筆していた(38)ということであるから、この二つの作品は、一九三〇年末から一九三一年七月までの間に書かれたことになる。

表題作の「玫瑰的刺」は、七つの随筆によって構成される。「二、池旁」では、真剣に女性の地位について議論を挑む廬隱の姿が見られるし、「五、她」では、不幸な境遇にもめげず力強く生きる女性が登場する。又、「七、時先生的帽子」からは、廬隱が何人かの軍人と交際があったことが分る。軍人の生活を書く為に、看護婦として従軍したいと語つ

ており、革命戦争に並々ならぬ関心を寄せている。

「歧路」は娼婦問題を取り上げている。革命の為に家出した良家の娘が、同志に弄ばれ、騙されて、果ては娼婦にまで身を落す。この事を知ったかつての革命の仲間が、しかしどうすることもできない。この仲間によって、娼婦は青年に悪影響を及ぼすから追放すべきだ、いや悪いのは社会であって娼婦を責めるべきではないという議論がなされるが、廬隱が売春問題についてさほど深い考えを持っていないことは明白である。従って、墮落した主人公の哀れさだけが強調される結果となっている。

「壯志長埋」は、革命家智水の虐殺を扱っているが、その妻や老父の悲しみを描写しながらも、作者はあくまで革命の外側で同情の涙を流しているばかりである。

この集では、幸福な結婚生活によって廬隱の心に平安が訪れた様子が手に取るように分る。今まで自分の孤独にばかり執着していた彼女の筆は、周囲の人物を客観的に描き始めている。

さて、この項最後の『象牙戒指』（商務印書館、一九三四年二月）は、親友石評梅をモデルにした長編小説である。高君宇との恋が主題となっているが、思想的リーダーとしての彼については、ほとんど言及されていない。又、石評梅が婦人団体を組織して会合を開いていた事が書かれているが、浮き足立って女性解放を叫ぶ人々の中で、彼女は頗る冷静であり、かつそういう人達に対して批判的でもある。

以上、一九二八年から一九三一年までの作品をみてきたわけだが、生まれて初めて廬隱は精神的に満たされた日々を送っている。文章は明るく、「東京小品」、「玫瑰的刺」といった新しい形の作品をものし、周囲に注ぐまなざしは暖かい。社会問題に対してはやはり部外者としての立場を取っているが、婦人解放問題については、廬隱のはっきりとした

考えが打ち出されている。

(五) 充実の時期（『女人的心』、『火焰』、『東京小品』第二・三輯）

『女人的心』（上海四社出版部、一九三三年六月）（未見）は、一九三二年頃書かれたようである⁽³³⁾。廬隱はこの作品について次のように述べている。

最近我所寫的『女人的心』我大胆的叫出打破藩籬的口號，我大胆的反對舊勢力，我更大胆的否認女子片面的貞操。

但這些還不够，我正努力着，我不只爲我自己一階級的人作喉舌，今而後我要更深沈的生活，我要爲一切階級的人鳴不平⁽³⁴⁾。

これによって、廬隱の婦人問題に対する態度が明確に理解できよう。

さて、この小説では、結婚して子供もいる女性素瑛が、純士についてアメリカに留学する。そこで同じく留学中で、愛人のいる夫と離婚し、純士と正式に結婚するが、帰国してみると周囲の風当りはあまりにも厳しい。主人公は純士と別れて田舎で後半生を送ろうと決心し、純士は懸命に彼女を説得する。この小説は主人公が迷っている所で終るが、彼女が幸福をつかむであろう事が示唆されている⁽³⁵⁾。旧礼教を批判し、結婚の自由を訴えるこの小説が明るい未来をにおわせているのは、廬隱の生活を反映したものであろう。

『火焰』は、一九三五年九月付排、北新書局より廬隱の死後出版された。一九三二年一月二八日に起った上海事変を扱ったものである⁽³⁶⁾。これはその数ヵ月後、夏休みを利用して執筆された⁽³⁷⁾らしい。前線で戦う一兵士の眼で終始描かれているが、作者が戦争をどのように捉えているかという点に絞ってみてゆくことにする。

まず、内戦について主人公は、「我們有時眞不明白、我們爲了什麼要當兵！ 我們爲了什麼要打仗？」⁽³⁸⁾と疑問を抱く。そして又「人類呀！ 爲什麼不能捨棄了侵略別人的自私的戰爭生活。而另找出路呢！」⁽³⁹⁾と嘆く。

敵である日本軍に対しても、ただ憎しみをもって描くのではなく、日本人たちも戦争の犠牲者であるという点を強調する。そして兵士たちは、この無意味な戦争が一日も早く終り、何人かでも犠牲者が少なくなればよいのだがと話し合うのである。無意味な戦争に対する糾弾という面からは、意味のある作品であろうが、ここには、国がこれからどういう方向へ向おうとしているのか、又自分達はその中でいかに行動すべきかという大きな視点が欠けている。これは作者の中にそれが無い為の当然の結果であろう。

この作品を貫いているものは、他ならぬ人道主義である。「新青年」にしても、廬隱がその会員であった文学研究会にしても、五四時期の中心的思想は人道主義であった。「海濱故人」集の「餘淚」で示された廬隱の人道主義思想と、十年後に書かれた『火焰』に於ける思想とは、基本的には同一のものであると言つてよいだろう。

最後に取り上げる『東京小品』第二・三輯は、前述のように一九三三年頃書かれたものと思われる。ここに含まれるほとんどの作品は社会問題を主題にしたものである。

「跳舞場歸來」は、五年間の留学経験を持つ美しい三十四歳の女性が主人公である。父から、「我希望你要作一個爲人類爲上帝所工作的一個偉大孩子、所以你終身不嫁、正足以實現你的理想、好好努力吧！……」⁽⁴⁰⁾と言われ、ひたすら勉強するが、気がついてみると、たった一人でとり残されている。彼女は結婚できなかった事を心から後悔し、貴重な青春を無駄にしてしまったと嘆く。

「飄泊的女兒」は、上海事変で揺れる社会を背景に、同性愛の若い二人の女性畏如と星若を描く。畏如は、男が女を

弄ぶように、自分も男を弄んでやりたいと考えている。社会のすべての法律は男の都合のよいようにできており、女は玩具のような存在に過ぎない、だから結婚したくないのだという。だが生活難の時代に男に伍して生きていく事はできず、両親を養うために、彼女は愛のない結婚を決意する。

男女の不平等を、どう解決にもつていけばよいのか見当もつかない当時の女性たちの戸惑いが伺える作品である。

「補襪子」は、共働き夫婦の間での家事の問題を取り上げる。ある日、破れたままの靴下を見て夫が怒ると、妻は靴下など繕っている暇はない、仕事と家事を万全にこなすなどというのは所詮無理な話だと反論する。夫の、「補襪子的太太、和能經濟獨立的太太不可得兼、也算是一個婦女問題呢……」(4) という言葉で二人は仲なおりをするが、これは李唯建との生活の一場面と思われ、前の二篇に比べて明るい作品となつてゐる。

「男人和女人」は、夫の浮気に我慢できなくなつた妻が家を出ようとする顛末を描く。イブセンのノラのように「人形の家」を捨てて自分の進むべき道を探そうと決意するが、簡単に夫に説得されてしまう。結局の所、ノラはイブセンの理想であり、女は永遠に埋れているしかないのだという妻の嘆息でこの作品は終る。

次に、女性解放について直接的に語つてゐる二篇をみてみよう。

「今後婦女的出路」では、良妻賢母の思想により、女性たちは社会への進出を阻まれ、独立した人格と社会的地位と個性を失つたと説く。男女には能力面での差はなく、女性の能力を埋れさせておくのは国家の損失である。経済的にも家事の面でも男女は同等に分担すべきであると述べ、女性たちに社会に進出して経済的な基盤を持ち、人間としての権利を回復せよと訴える。経済的に独立し得た女性の自信に満ちた発言である。

「花瓶時代」では、働く女性たちに自覚を促している。尊大な男たちが、奴隸階級の中から女を解放してくれたが、

女たちはまだ、単に職場の花に過ぎず、いつ捨てられるか分らない存在である。だから女性は自らを救うことを考えなければならず、決して男達に恩恵を乞うたりしてはならないのだと述べる。問題は、ここでも男対女の次元にすり変えられている。

以上の二篇から、婦人問題は婦人自身の手で、自ら目覚め、努力を重ねることによって解決しなければならないという考えが読み取れる。同等の権利を獲得する為に精神的・経済的自立を訴えるが、社会問題の一環として女性解放問題を捉える眼は持っていない。

この他に水害に関する三篇の文章が注目される。

「水災」は、水害の為に妻子を失い、無一物となった男を描くが、ただ悲惨な状況を写すだけに終わっている。

「災還不効」では、今度の水害は人災であり、指導者達は無策であるだけでなく、これを金もうけに利用しているという批判が述べられる。これに対して同僚は、ぎりぎりの所まで追いつめられれば人間は立ち上るはずである。いまだ民衆が抵抗しないのは災害が十分足りてないからだと言張し、「私」と対立する。そして「代三百万災民請命」では、民の義援金を巻き上げる役人達に、良心を持つてと呼びかける。

以上が、一九三二年以後に書かれた廬隠晩年の作品である。「女人的心」で、世間から激しい圧力を受けながらも強靱に生き抜く女性を描き、『火焰』で戦争に取り組み、『東京小品』で高らかに女性解放を叫んだ廬隠は、一九三四年五月十三日、三十五歳の若さで、難産の為に他界する。精神的にも思想的にも、そして表現技巧の面でもやっとその基礎ができたという所であったのに。

結 び

廬隱は社会問題を主題とした小説を数多く書いてきた。だがそれは、終始一貫して傍看者の眼で描かれている。他人の日記や手紙を読む、人の話を聞くとといった、作者は小説の前後にほんの少し顔をのぞかせるだけの、そういう受身的な形式をとる小説が多いからかも知れない。そして又、彼女の大き過ぎる悲哀も一因となっていたであろう。だが、何よりも大きな原因は、廬隱が本質的に非政治的な人間であったという事にあるのではないだろうか。

社会問題の中で、唯一自分の問題とすることができたのは婦人問題であったけれども、売春を始めとする底辺の女性たちの問題については、同次元に立つて考えてみる事ができなかった。廬隱は中産階級の人間であり、彼女の女性解放論は、あくまでも中産階級の女性解放論であった。しかし、だからといって、彼女を責めることができようか。

女である廬隱の前には、具体的な様々な差別問題が横たわっていた。そして、彼女は勇敢にその一つ一つを乗り越えていったのである。廬隱の解放論は、実際の生活の中で培われたものであった。母親に反対された為に、全くの自力で大学へ行き、卒業後は教師として社会的、経済的地位を確保した。旧礼教がまだ生きている社会にあって、妻を持つ郭夢良との結婚も、八歳年少の李唯建との再婚も想像を絶する苦難があったはずである。だが、そういった数々の試練の中でも彼女は着々と小説を書き続けた。走りもしなければ止まる事もない。「悲哀の作家」、「抒情の作家」と呼ばれる廬隱は、意外にしたたかに己の人生を生ききったようである。

〔注〕

- (1) この年、盧隱二十一歳、大学三年。
- (2) 『海濱故人』商務印書館、一九三〇年三月五版、一五三頁。
- (3) 一九二三年、上海一品香旅社にて挙式。
- (4) 一九一九年入学、一九二二年卒業。
- (5) 「我整天爲奔走國事忙亂着、——天安門開民衆大會呀、總統會請願呀、十字路口演講呀、這些事我是頭一遭經歷、所以更覺得有興趣、竟熱心到飯都不吃、覺也不睡的幹着。」(『盧隱自傳』第一出版版、一九三四年十月十五月初版、六四頁)
- (6) 女師大学生会の幹事、女師大福建同郷会の代表、又その大会の副主席、刊行物の編集、福建同郷会のメンバーを中心にした秘密の団体「社会改良派」(Social Reform)の一員と、かなりの活躍をしていたようである。(『盧隱自傳』六四、六九頁)
- (7) 同、九〇頁
- (8) 『盧隱傳』肖鳳、北京師範大學出版社、一九八二年二月、五五頁
- (9) 『華嚴半月刊』を編集していた一九二七年頃。
- (10) 『中國現代女作家』閻純德主編、黑龍江人民出版社、一九八三年六月、二六六頁。
- (11) 『靈海潮汐』一九四〇年十二月五版、三六頁。
- (12) 同、六三頁。
- (13) 同、一六五頁。
- (14) 同、一五四頁。
- (15) 『盧隱選集』肖鳳・孫可編、百花文芸出版社、一九八三年十月、一七〇頁。
- (16) 『盧隱、中國現代作家選集叢書』肖鳳編、三聯書店香港分店・人民文學出版社、一九八三年五月、八二頁。
- (17) 『盧隱傳』六〇頁。
- (18) 同、五六頁。
- (19) 同、五五頁。
- (20) このことは、一九八〇年十一月二八日、盧隱の友人陸晶清が肖鳳に直接語ったという。(『盧隱傳』六四、六九頁)

- (21) 『小説文選——近代中國女士著作家』 上海文學社、一九三二年三月一日、二二六頁。
- (22) 同、二八一頁。
- (23) 同、二四二頁。
- (24) 『廬隱自傳』 九六頁。
- (25) 一九二八年三月三日に瞿世英宅で紹介され、一九三〇年八月に結婚。
- (26) 『雲鷗情書集』 初版本、六頁。
- (27) 上海事変を指す。
- (28) 『廬隱傳』 九七頁。
- (29) 「論廬隱的後期創作」(『華東師範大學學報』 一九八四年第一期、四二頁)
- (30) 『東京小品』 一九三七年三月再版、二〇頁。
- (31) 同、四四頁。
- (32) 『廬隱傳』 八三頁。
- (33) 同、九一頁。
- (34) 『廬隱自傳』 九七頁。
- (35) 『廬隱傳』 九二・九三頁。
- (36) 廬隱は当時上海に住んでおり、この戦争を實際に見ている。又、女生徒を連れて兵士の慰問に行き、直接多くの英雄の事蹟を聞いたりもしている。(『論廬隱的後期創作』 錢虹)
- (37) 『廬隱自傳』 八七頁。
- (38) 『火焰』 一九三七年三月再版、二四頁。
- (39) 同、七四頁。
- (40) 『東京小品』 一六八頁。
- (41) 同、二三〇頁。